
闇を照らすもの

みずしろ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

闇を照らすもの

【Nコード】

N4581M

【作者名】

みずしろ

【あらすじ】

時は幕末。

幼いころに両親を無くした菊浦信太は攘夷派の人斬りとして暮らしていた。

小さい頃生き別れた姉を探すために生き続ける術だったのだ。

菊浦信太は姉と再会できることができるのか。

第一話（前書き）

はじめまして、みずしろというものです。

初投稿作品になりました。この闇をてらすものですが、私自身の2作目にあたるものです。

とは言っても未完のままの状態で数年も放置していました。執筆活動に忙しくなり、この作品に時間をかけることができなかったからです。

少し時間ができるようになったので当時かき集めた資料を取り出し、書こうかなという思いになりました。

コアな部分も出てきますので歴史に詳しいかたは結構裏の部分までわかると思います。

読んでいただけたら幸いです。よろしく願いいたします。

第一話

少年は血まみれだった。

少年だけではない。塀、道、木、周り全部が血の雨が降ったかのように赤い。

刀から滴り落ちる液体を見て刀身をふき取る。ふき取った紙を足元の死体に落とし、口を開いた。

「後処理お願いします」

すると物陰から数人現れ死体を運びだす。

「おつかれさん、今日も鮮やかだったよ」

声をかけてきた男に簡単に会釈をしその場を離れる。相変わらず無愛想だなという声が後ろから聞こえてきたが気にしない。

誰とも親しくしないしかかわろうともしない。仕事以外ではほとんど会話もない。人斬りである菊浦きくうら信太はそんな男だった。

仕事は土佐藩や薩摩藩、肥後藩などの反幕府側からの依頼だが菊浦の名は表に出ない。

表にでる名前は河上彦斎や中村半次郎など藩の人間の犯行とされた。

藩に属していない菊浦はまさに闇の存在とされていた。

帰り道、空を見上げるとまぶしいばかりの星がきらきらと輝いていた。

「姉上……」

遠い目でぼそりという。

六年前、小さな村の外れにある小さな小屋で住んでいる家族がいた。

父親と姉である菊、そして信太の3人。五つ年上の菊とよく山に食料を調達したりして生活しており、信太が物心ついた頃から三人で暮らしてたのだが、菊の話によると母や他の兄弟がいたらしい。

母親と兄の二人はコレラで死に、残りの兄や姉四人は売られていったのだと。

そして、体の弱い菊とまだ赤ん坊だった信太は「買ってもしようがない」と売られずにすんだこと。

その話をする時の菊はいつも悲しい目をしていたが信太を可愛がり大切にしていた。あんな事があるまでは……。

少しの間昔のことを思い出しながら歩いていたが、人の気配を感じたので集中する。

「こんばんは、また会いましたね」

後ろから声がした。丁寧な口調で静かな声。

信太は後ろを振り向きながら相手の名をもらす。

「沖田総司……」

警戒をいつそう強める信太。

なるべくなら出会いたくなかった相手。新撰組一番隊の隊長、新撰組で一、二を争う剣豪。撃剣師範でもある。そんな男が今目の前にいるのだ。

「菊浦さん、ここ数ヶ月の幕府側武士を斬ってるのはあなたでしょ？」

腰の刀に手をかけながら沖田総司が言う。

「河上さんや中村さんの犯行と言われていますが八割はあなたの犯行ですね。影で動くあなたの存在が知られたくない維新側の気持ちもわかりますけどね」

信太も刀に手をかける。

「引く気は？」

出来るなら仕事あとの疲れた時に戦いたくない相手だ。

「あるなら刀に手をかけると思いませんか？」

ないな。とつぶやきお互いに刀を抜く。

太刀先がやや下がり気味で前のめりの構えの沖田総司。そこから来る三段突きを警戒する。目にも止まらぬ速さで突かれては一瞬で勝負が決まる。

信太は手に汗を握った。

先ほど五人を斬ったあとに血のりをふき取るくらいしかしてない刀で沖田総司を斬れるか……。

今まで三度対決したがコレほどまでに分が悪い状況は初めてだ。

「今日こそ覚悟してください」

そう言うと言太に斬りかかる。三段突きではない。ただの振り下ろし。

それをかわし、間合いの一步外にでる。

「だいぶ疲れてるみたいです」

足取りを見た総司が言ったが、まさにその通り。最近依頼が毎日のようにあり、疲れが蓄積されている。

「……やめです」

総司は刀を納めた。

「そんなあなたを斬っても面白くありません」

信太に背を向け歩き出す。

完璧になめられている。間合い一步外で敵に背を向けるなんて斬ってくれといっているのも当然。だが信太は斬れない。悔しいが総司の目は狂っていない、体に力が入らないのだ。

助けられた……。敵に……。

強烈な屈辱が信太を襲う。

「では菊浦さん。生きていればまた……」

最後にそう言って夜道に消える。

それを見た信太も刀を納めてフラつきながら歩き出す。

少し歩いたところで「菊浦信太をお見受けしました。覚悟」と声がしたと思うといきなり刀を振りかざしてきたが、信太は瞬時に抜刀し刀を受け、払い飛ばした。

「俺は今腹正しいんだよ」

この世の目とは思えないするどい目で睨みつける。

「ひい」

すつかりと腰を抜かした相手に信太は。「死ね」と一言。

静かな夜にゴトリと鈍い音が響く。

一振りで首を斬りおとしたのだ。

帰ってきた総司を迎えたのは永倉新八だった。

「永倉さん、ただいま戻りました」

おつかれさんと永倉は返答し、その後に「近藤先生がお前に用があるみたいだったぞ」と、先ほど総司を探していた近藤勇のこと思

い出しながら言った。

「先生が？」

なんだろうと思いつながら勇の部屋へ向かった。

「先生、沖田総司ただいま戻りました」

部屋のふすまの外から言う。

「おお、戻ったか。ちょっと入ってきてくれ」

と勇。その声を聞いてから、失礼します。といいふすまを開け、中に入った。

「お前の刀もそろそろ刃こぼれしてきてるんじゃないか？」

「はい。切れ味が落ちてきてしましまして……」

苦笑する総司。

「そこで、ほら」

勇が刀を差し出した。

「大和守安定だ。やまどの かみやすさだ宗兵衛とも言うが。かなり切れ味のいい刀だ」

「大和守安定……こんないいものをもらっていいんですか？」

「ああ、剣士と言うのはそれに見合った刀を持たないとな」

渡し終わると勇は表情を変えた。その様子を見て総司も真剣な眼差

しで勇をみた。

「本題に入るが。情報が入った」
一気に空気が変わる。

「明後日、池田屋か四国屋で尊攘過激派が京都火計襲撃計画の協議する会合があるそうだ」

「京都火計ですか……」

「ああ、搜索するんだが今新撰組は病人が多い。だから俺の隊と土方の隊の二つにする。俺の隊はお前と新八、武田観柳斎、藤堂平助と残り五人の十人だ。土方の方は後の動けるやつ……まあ二十四人くらいだ」

一番隊、二番隊、五番隊、八番隊の隊長が近藤の隊につくのとこのどだ。総司は「はい。承知しました」と答えた。

その後挨拶をし、部屋を出た。

「明後日か……」

昼間、信太は声をかけられた。

「今日の仕事は一件だが、その後は明日のためにしっかり休んでおけよ」

「はい……」

桂小五郎に仕事をもらったのだ。

池田屋での協議の間の実力者達の護衛。護衛ではじめての表仕事。今までと違いいざと言う時は守りながら戦わなければならない。しかもいつくるかもわからないのだ。来るとすればおそらく見回り組か新撰組だろう。

「沖田総司……」

この前のことが頭をよぎる。あの時俺を斬らなかったことを後悔させてやる。と拳を握った。

その夜、信太は天誅を下した。鮮やか以外に言葉が見つからない。月の光で青白く刀が一筋の線を写したかと思うと血ふぶきが上がる。

もはやそれが当たり前のことのようにスムーズに行われる。

相手は抵抗の余地なし。

「うう……」

うめき声が聞こえるが無視。

颯爽とその場を離れる。

今日は少し休むか……。と池田屋の仕事を思い刀の手入れをして休息に入った。

夕暮れ時。信太は井戸の水をくみ、顔を洗っていると桂小五郎が声をかけてきた。

「疲れとかはないだろうな？」

「大丈夫です」

簡単に答えたあとにもう行くんですか？と聞いた。

「ああ……いや、俺は一度戻るからお前は先に行ってくれ」

「わかりました」

信太は桂と別れ、先に池田屋に向かった。

到着するともう十数人集まっていたので邪魔にならないよう隅に座り込んだ。

夜がふけた頃。近藤の単独行動により二手に分かれて搜索していた新撰組は池田屋で討議中の攘夷過激派を発見した。

「二十人ばかりか……」

よし、と勇はいうと指示をだした。

「俺と総司と新八、平助の四人で踏み込む。残りは屋外を固めろ」

「はい」

準備が整い勇が合図を出すと四人は池田屋の戸を蹴り破り中に斬り込んでいった。

信太は部屋の隅で座っていたが下の階からの物音が気になり吉田稔麿に声をかけた。

「下から物音がします。念のため備えていたほうがいいかと」

深夜の宿、警戒するに越したことはない。

「そうだな、気だけは引き締めておかねばな」

その瞬間、障子が蹴り破られそれと同時にそばにいた数人が斬られた。

入ってきたのは四人組、袖口にダンダラ模様を白く染め抜いた浅葱色の羽織を着ている。

「新撰組！」

空気が一気に変わる。

攘夷派二十名も刀を構える。

「菊浦！ 脱出口を確保しろ！ 行け」

吉田稔麿が叫んだ。その声に新撰組四人の表情も変わる。

「菊浦……」

その存在だけがあるとわかるだけで重圧がかかる。

信太はすぐさまふすまを蹴り破り隣の部屋から廊下へと出た。

行かせまいと沖田が追いかけようとしたが攘夷派武士五人ほどで止める。

「っち……」

沖田は自分に振りかかってくる剣筋をかわし、攻撃を仕掛けてきた方へと踏み込む。そしてそのまま下から斬り上げ。血が噴き一人倒れ込む間に次が襲い掛かってくる。

後ろからの剣撃だったがすばやく反応し、振り返ると同時に刀で受け掃う。相手がひるんだ隙に鋭い突き。よけれるはずもなく当たり前のように大和守安定の餌食となる。

それもそのはず。一度踏み込む間に三度の突きが飛んでくるのだ。

瞬きをするうちに二人を斬った沖田。

強い。攘夷派の頭にはその二文字しか浮かばなかった。

階段を駆け下りた信太は裏口へと急ぐ。

すると信太に気がついた安藤早太郎、奥沢栄助、新田革左衛門の三名が襲い掛かる。

奥沢が振りかざし信太へと刃を向ける。が、信太はかわし鞘から抜刀とともに奥沢の首を刎ねる。

「おのれ！」

安藤、新田が二人がかりで信太にかかる。

信太は、とっさにしゃがみかわしながら足の建を斬り、倒れ込んだところに刀を突き刺す。刀を抜いた流れのまま刀を振り上げもう一人の腹を裂く。

二人共倒れたがもがいているので即死はしていないが、信太はすぐに上に戻ろうとした。

しかし、階段で藤堂に遇った。下りてきていたのだ。

「菊浦！ 覚悟」

鋭い剣筋。刀で受けたが藤堂の力に押される。

「くっ……」

流石に隊長クラスは一筋縄には行かない。と思ったがここで時間をとるわけにはいかない。

状況を変えるために刀をはじき間合いをとる。が、すぐさますさまじい攻防が繰り広げられる。

傍から見たら互角、だが気で押されているのは藤堂の方だった。

沖田総司を引き分けるほどの剣を振るう菊浦が相手。気が抜けない。との思いが藤堂に汗を噴かせた。

「強いな……」

思うが口に出さない信太。隙を見せないと同時に藤堂の隙を探る。

（汗……！？）

廊下に落ちていた滴に気がついたので顔を見つめると大量の汗を掻いていた。

よし……。これまで以上にすばやく動く信太。それについていくと藤堂の動きも速くなる。

藤堂の刀をかわし後ろへ回り込む。すぐに振り向く藤堂だがそれを見た信太がまた回り込む。

それを何度か繰り返したが痺れを切らした藤堂が振り向きざまに斬りかかってきた。が、汗で額に巻かれていた鉢金がずれた。一瞬藤堂の動きが鈍くなる。

信太はそれを見逃さない。

まってましたといわんばかりに藤堂の剣筋を飛んでかわした。空中に浮いた状態のまま鉢金のずれてさらけ出された額に太刀をいれる。

「く、浅いか」

間合いに入りきれず致命傷を与えなかった。
だが、それでも十分だった。

藤堂は倒れ、戦線離脱したのだ。

信太は階段を駆け上がり部屋まできたがすでに十名ほどが斬られていた。

「――裏口を開けました。そこから外へ」

一番近かった数人がその声とともに下へと逃げ出す。

（奥の皆も逃さねば）

駆け寄ろうとしたら沖田総司が振り返りこちらに近づいてきた。

「先生、菊浦さんは私に……」

「ああ、任せる」

「ありがとうございます」

そう言うと総司は構えた。

太刀をやや下に向け前のめり。近藤勇とやや異なる構えだがかなりの威圧感だ。

「さあ、菊浦さん。覚悟してくださいね」

四度目の総司との戦い。

信太は、これまでの総司との戦い方と変えた。刀を納め帯刀した。

「拔刀術ですか……」

総司の三段突きの速さに打ち勝つための信太が出した答えだった。構えたまま少しの間二人の時間が止まる。

あまり時間をかけてもいられない。それは総司も同じだった。

信太は即急に近藤勇や永倉新八と戦っている連中を池田屋から脱出させなければならない。総司は逆に近藤や永倉の加勢しなければならぬ。

二人は同時に動き出す。信太は拔刀術、総司は三段突き。

信太は突きの一撃目を拔刀と拔刀と同時にひく。

結果、三段の攻撃はならず、一撃目で防いだが、総司はやはり速い。はじかれたがすぐに立直し振り下ろしへと剣筋を変える。

信太はそれに気づいたが拔刀術で振りきっているために受けるも攻めるも間に合わない体制。

振り切った刀を持ってくる前に斬られてしまう。

しかし、自然と体が前へと出た。

間に合わないと思って刀を思いっきり前に振り切ろうとする。

「ぐ……」

鈍い音。

信太は柄で総司のみぞおち付近を強打させていたのだ。

かなり強烈な痛みが総司を襲う。そして吐血。床に伏せ痛みと格闘を始めた。

信太は急いでまだ戦闘中の攘夷派の面々を助けなければならない。

向かおうとした時、頭から何か流れてきたことに気づく。

「血……」

流血していたのだ。総司の刀は届いていたのだ。勝てたのはまさに紙一重。一瞬でも遅かったら死んでいたであろう。

しかし、休んではいられない。

残りの敵は2人とはいえ、近藤と永倉なのだ。いくらで有利とはいえ油断できない。

痛みをこらえて近藤、永倉の元へと歩いていく。

「菊浦!？」

永倉は沖田の方を見る。血を吐いて倒れているのが目にはいった。その隙を見計らい一人が永倉に斬りかかった。が、下段からの上へと敵の剣を擦り上げ永倉はそのまま下へと斬りつけた。

「龍飛剣――！」

見誤っていた。油断できないのではない。油断できるはずもなかったのだ。

「俺が食い止める！皆は速く外へ！」

その言葉でいっせいに尊攘派が逃げ出す。
信太は近藤、永倉をなんとか逃がすことの出来る程度に食い止めることが出来た。

しかし、完璧に押されている。

「菊浦、一人で二人相手に勝てると思ったか？」

「勝てなくとも、生き残ればいい」

信太は防ぎ続けた。ギリギリ当たるか当たらないかのところでよける。うける。

少しでも気を緩めたらその瞬間に殺される。息を吞んだその時。

外が一気に騒がしくなった。

そして数人攘夷派武士が部屋に戻ってきた。

しかし、様子がおかしい。助太刀に來たようではないようだ。

その時、廊下から数人部屋へとはいってきた。

「土方隊只今到着いたしました」

二別していた土方隊。これで完璧に新撰組有利になった。
尊攘派は信太を含め動けるものは五名。

「万事休す……か」

「おい、菊浦……ここはもういい。脱出したものたちの護衛に行け」
怪我で倒れていた吉田稔麿が信太に言った。

「お前は我等尊攘派に必要な存在だ。ここで散ってはならん」

しかし、信太は戸惑い、立ち尽くした。過去の幼い頃の記憶が信太の動きを止めていた幼く弱かった自分は父親を大切な姉を助けることは出来ず、目の前で……。

「おい！ 菊浦行け。皆を無駄死にさせるんじゃない」

その声で信太は我に返った。

「いいか、頼む」

「――承知しました」

信太は屋根へと出た。

下には十数名の新撰組隊員が辺りを囲んでいたが、斬り抜けるしかない。

意を決して飛び降りる。

それと同時に。

「一人逃げるぞ捕らえろ！」

との声が響く。

信太は走り出した。とりあえずここは逃げ切るしかないのだ。

第一話（後書き）

いかがでしたか？

ちょうどこの本編までが作家になろうと思った当時書いていた部分までになります。

2話目からは現在の私が書くので文章表現等が微妙に違うかもしれませんがご了承ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4581m/>

闇を照らすもの

2010年10月9日14時28分発行